横浜市立太尾小学校

学校だより

令和２年度11月号

令和２年１０月３０日発行

＜　豊かに学び　ともに未来をひらく　太尾の子　＞

教科に返る学び

校長　　館　雅之

ふれあい広場で２年生が学習をしています。何をしているのでしょうか。じっくり耳をすまして、聴こえる音に集中しています。音さがしの活動です。以前は音楽は音楽室で、図工は図工室で学習するというイメージがありましが、今は教室だけが学びの場ではありません。

この活動は、低学年の音楽の指導内容、音楽づくり「身の回りの様々な音の特徴についてそれらが生み出す面白さなどと関わらせて気付くこと」に位置付けられています。特にここでは、自然や生活の中で耳にする音に着目した活動と考えられます。

さて、先日「あゆみ」をお渡ししました。その「あゆみ」では、今年度から新しくなった評価の観点で評価した状況をお伝えしています。全教科同じ枠組み（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）ですので、わかりやすい面と各教科ではどうとらえたらばよいかわかりにくい面があったように思います。

前述の２年生の活動の例では、一人一人が感性などを働かせて聴こえてくる様々な音を感じ取りながら考え、自分なりに理解していくことが「知識」であり、「この音は今まで気が付かなかった」「この音は不思議だ」「ここからもこんな音が出ているんだ」という実感を伴った気付きが「思考・判断・表現」であるととらえることができます。

そこで大事なのは各教科の「見方・考え方」と言われています。全教科同じ枠組みであることは教科の内容に関わらずすべての学びの柱になっていきます。とはいえ、教科の学習はあるわけで、教科等に固有の「知識」や個別の「スキル」があります。その教科ならではの教科の本質に関わるものが「見方・考え方」です。

今までは教科の学習があり、そこから学びを考えていくことが多かったと思います。「国語では…」、「算数では…」という言い方がその現れです。その上で、共通に必要なことは何かという考え方は、教科から発する学び方だと言えましょう。一方、教科の枠組みは時代ともに変化していくものです。これからは、教科に返る学び方という発想が今まで以上に大切になってくると考えます。

この考えでは、子どもの得意なこと、今興味があることを伸ばしていくことが何よりも大切になってきます。学びの「内容」ではなく、子どもの「学び方」に着目することが求められてくると言えましょう。

新しい評価の枠組みはそのような可能性があると私は考えています。

感性を研ぎ澄ませまち、自然の音を聴く

水槽からはどんな音が聴こえたのだろうか

作曲科・即興演奏家の寺内大輔さんの作品に「耳の音楽（Ear Music）」があります。この作品は、自分が自分の耳を触った時の音で成立する音楽です。自らの耳を即興的に触ることによって演奏するもので、演奏している本人にしか聴く事ができません。耳の触り方や演奏時間は自由です。様々な触り方を工夫すると、多彩な音が聴こえ、自分にとって興味深い音楽に感じていきます。ぜひ体験してみてください。この活動(演奏）を通してご自身が身に付けた「知識」や「思考・判断」は何でしょうか。もちろんこの活動を行おうとし、さらに探求を続けた方は「主体的に学習に取り組む態度」は身に付いていると言えるでしょう。